
ヒツジとオオカミ

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒツジとオオカミ

【コード】

N2569Q

【作者名】

雑

【あらすじ】

仁王のことが気になるひろし。ジェントルマンではなく、乙女モード全開です。

く突撃！柳生家の晩御飯く

「今日やぎゅんち行っていいかのお？」部活帰りに伸びをしながら仁王君が言った。

「両親は海外だからいいですよ？」軽はずみに返事をしてしまったが、仁王君が家に来るなんて初めてだ。鼓動が高まる。

「ピョ？ここがやぎゅんちか？でっかい家じゃ！」玄関前で目を真ん丸にして仁王君が見上げる。

「大きいですか？でも、仁王君がそう思うならそうかもしれませんね。」自然と冷めた口調になる。両親のものに興味はない。

「なんじゃ、冷たいのお。せつかく人が誉めてやってるのに…。」
ブツブツと不満を溢す仁王君。

「すいません。両親のものを誉められてもあまり嬉しくなくて…。」
苦笑いをする。しかし本心だ。

「…プリッ。」一言発し、黙ってしまった仁王君。仁王君は他人の心を読むのが巧い。だからこそこついう場合楽なのだ。

まず家の居間に案内し、夕飯をご馳走した。普段なら簡単に済ませてしまうが、今日は仁王君がいるので料理にも力が入る。

「んあー食った、食った。やぎゅはいいい奥さんになるぜよ！」満足
そんな笑みを浮かべながら仁王君が言う。

「え…？」ドキドキして思わず口に入れたミニトマトをポロツと膝に落とす。

「冗談じゃき」「悪戯つぱく笑う仁王君。

「あつ…そ、それはそうと何か用事があったのですか？」動揺する
気持ちを抑えようと話題を代える。

「あー！忘れるとこだったぜよ。正月は暇かのう？」小首を少し傾

げて聞いてくる仁王君。仕草まで愛らしい。

(もうそんな時期なんだな...)。カレンダーをぼんやり眺める。

「毎年お正月は、家で過ごしますけど。」

「んじゃ話は簡単じゃ！一緒に初詣行くぜよ。」

「ちよつ...ちよつと待って下さい。」

「なんじゃ？嫌なんか？」仁王君が上目遣いで不安そうに見てくる。

「ちがつ...違いますっ！ただふたり...ですか？」改めて口にして赤面する。

「ピョ？もちろんブンちゃんもジャツカルも呼ぶぜよ！皆で甘酒じゃ！」Vサインを作って嬉しそうに笑う仁王君。

「で、ですよねっ。」安心した半面ガツカリする。

初詣当日。なんとなく緊張して、約束の時間より30分早く着いてしまった。どうしようかと集合場所の辺りをウロウロしていると...

「あちゃーおばちゃん！財布忘れてきたぜよ。まけてくれんかのう？」言葉とは裏腹にあまり困ってなさそうな調子の仁王君の声が聞こえた。

「にいちゃんカツコイイから、おばちゃんおごつちやうよ！」出店のおばさんの威勢のいい声が聞こえた。

「仁王君？もう来てたんですか？」驚いた。今更だが、私服で会うのは初めてだ。なんだかいつもより仁王君が眩しく見える。

「んあ、やぎゅ？やぎゅこそ早いのがう。わしは楽しみで早く来すぎたんじゃ！」「りんご飴を頬張りながら仁王君が言う。

「まあ家が近いので...。それより今日お財布忘れたんですか？」先ほどの会話を思い出す。

「プリ。...そうじゃ！やぎゅ貸してくんしゃい。」目を輝かせる仁王君。

「いえ、今日はおごりますよ。仁王君が誘ってくれなかったら初詣なんて来ませんでしたし。」人混みは苦手だが、誰かと正月を過ごせることは嬉しかった。

「いた、いたあ！なあにイチャこいてるよい？」丸井君がガムを噛みながら走って来た。

「いつ…イチャイチャなんてしてません！」声が上擦り、顔から火が出そうだった。

「イチャこいてなんかおらん。つか、ブンちゃん遅いぜよ。」ふうと口を膨らませ不満を言う仁王君。

「まだ約束の時間前だったの。ふたりが早いんだよい！」へらへらと笑う丸井君。

「ピヨ？ブンちゃんそう言えば、ジャツカルは？一緒じゃないんか？」キヨロキヨロと辺りを見回す仁王君。

「あージャツカルは、じいちゃん家行くから来ないってさ！アイツいねーといまいち盛り上がんねえけど、せっかく来たんだから楽しもうぜい！」赤い髪をかきあげて丸井君が言う。

「まあ仕方ないのう。じゃ行くぜよ！」仁王君の言葉を合図に歩き出した。

ドンツ

ごった返す境内で他人にぶつかる。

「あつ…すみませつ…。…けっこう混んでるんですね…って、あれ…？」いつの間にか仁王君も丸井君も見失ってしまった。

「こつちに向かって歩いてれば多分会えるはず…なんだけどっ…。」焦りが生じ、途端に心細くなる。

グイッ

いきなり手を掴まれた。

「へあつ。」驚いて、情けない声を出す。

「どーこ行ってるぜよ？」仁王君が呆れた様に言う。

「に、仁王君！普段あんまり人混みに出ないから、迷ってしまいました。その…すいません。」と言いつつ、意識は繋いだ手に集中し

ている。それに気づいた仁王君が、

「やぎゆ離すとすぐどっかいくからのう。こうしとるのが1番じゃ
!…拒否権は無いぜよ?」手にグツと力を込め、妖艶な笑みを浮か
べる。

「あつ…ま、丸井君!丸井君はどこに?」仁王の視線に耐えられず、
正直忘れていた丸井君を話題に出す。

「プリ?ブンちゃんなら、どこぞで女子に囲まれとるぜよ!心配い
らん!」仁王君が自信たっぷり言う。

「フフツ。そうですね。」思わず笑ってしまった。

く天使と悪魔く（前書き）

仁王たちとはぐれ、ひとりになったブンちゃんが出会ったのは果たして…！？

く天使と悪魔く

「はくしゅっ！まあた誰か俺の噂してんな。モテる男はつらいぜい。
」その頃思いつきり勘違いをしていたブン太はと言つと…

「あのっ…立海大付属中の丸井ブン太さん…ですよね？」仁王のい
う通り女子のグループに声をかけられていた。

「ん？そうだよ！ブンちゃんって呼んでね。」パチツとウイंक
をする。その場に居た女子がキヤーと歓声をあげる。

「丸井君くん、こんなところでナンパ？はつきり言つて迷惑なんだよ
ね。」殺気を感じて後ろを振り向くと幸村が立っていた。笑つてい
るがその笑顔が怖い。

「ち、ちがうよ！俺は自己紹介のつもりでっ…。」弁解しようと
するも言葉が見つからない。

「つもりで何？」幸村の絶対零度の目線と言葉が刺さる。
「……っ。」視線を反らす、冷や汗が止まらない。

「まあ部活に支障のない範囲ならいいけど。行こっ華澄^{かすみ}。」立ち去
ろうとする幸村。

いつもなら小姑みたいな小言を言ってくる幸村が今日はやけにあつ
さりと引いた。それより衝撃だったのは、彼が優しく呼んだ少女。
華奢で可憐なその少女は幸村に手を引かれながらも、ブン太に軽く
会釈をした。

「幸村、待てよ！誰それ？」反射的に呼び止める。

「別に関係ないでしょ？」眉をひそめる幸村。

「関係ないけど、気になるから聞いてんだっ！」何故かむきになつ
てしまった。

「せいちゃん…あの、この人は…？」おずおずと幸村の背中から顔
を出し訊ねる華澄。

「ん？同じ部活の丸井ブン太だよ。悪いやつではないよ、一応。」
ブン太に向けられるのとは天と地ほどの差があるやわらかい声で幸

村が言う。

「どんな紹介だよ！まあいいや、俺ブン太。よろしく！」怖がらせないよう笑顔で言う。

「あ、えっと…せいちゃん妹の華澄です。兄がお世話になってます。」ハニカミながら華澄が言う。

「そ…そんな…こちらこそ？」華澄に見とれていたことを隠す為早口に言う。

「僕は世話になった覚えはないけどね。」しれっと皮肉を幸村が呟く。

「……………」

(こっ、こいつ…)頭にはきたが、後が恐いので何も言えなかった。

くライバル!!恋バナ仲間!?? (前書き)

まあた登場人物増やしてしまいました。∴収集つくかなあ (笑)

「ライバル」恋バナ仲間!??

「華澄ちゃんかぁ〜可愛い子ってのは名前も可愛いぜい。」足取り軽く帰路につく。あの後結局仁王と柳生には会えなかったが、今はそんなのどうでもいい。

「ああーこの気持ち!誰かに話したい!!…あ、そうだ。」いそいそと携帯を開く。

「…プル…プルル…ふあい、こちら岳人です。」明らかに寝起きな岳人の声。

「ぶっは…!、何『こちら岳人』って…!トランシーバーじゃねえぜい…!」笑いが収まらない。

「う、うっさい!寝ぼけたんだよ!こっちは正月から部活で疲れてんだ、仕方ないだろ!」恥ずかしかったのか、捲し立てる岳人。

「で?何?」岳人が口早に話題をすり替えようとする。

「えっとさ…。」あんなに誰かに話したかったのに、いざ話そうとすると、なかなか言葉にならない。

「ん?早く言えよ。」岳人がぶっきらぼうに言う。

「…えっと…がつくんの声が聞きたかっただけ」

「…っ…バツカ!な、何言ってるんだ!切るからな!」照れているのが、電話越しでも解った。

「待てよい!冗談だって。今日さあ柳生と仁王と初詣行ったんだけど…そこに幸村も妹さんと来ててさあ…。」華澄のことを思い出し、ひとり赤面する。

「……………」黙っている岳人。

「その…妹さんが華澄ちゃんっていうんだけど…。」

「……………」また無言。

「もうプリティー?キュート?とにかく天使みたいに可愛くて、性格良さそうで…。って聞いている?がつくん。」華澄を思い出し、う

つとりとしていたが、岳人の異変に気づく。

「…何で、その話をわざわざ俺に？」なんとなく責めているような口調の岳人。

「ああ！別に誰でも良かったわけじゃないぜい。」慌てて訂正する。

「…え？」岳人が頼りなげな声を出す。

「ほら、やっぱ同じガツコの奴だと恥ずいし、がつくんなら口固そうかなって。」ぼりぼりと頬をかきながら言う。

「そっ…か…。じゃあもう用は無いんだな。…切るぞ。」急によそよそしくなる岳人。

「あ、岳人！」真面目な声で岳人を呼ぶ。

「なっ何？」驚いたのが声が震える岳人。

「寝てるよと悪かったな。良い夢見るよ？」何だかんだかんだ言いつつ、聞いてくれた事が嬉しかった。

「ばーか！」岳人の声が少しだけ和らいだ気がした。

くライバル!!恋バナ仲間!?? (後書き)

整理すると…

にお ひろし

岳人 ブン太

ブン太 華澄

…です。

〜恋煩い〜（前書き）

ひろし乙女モード全面です！

く恋煩いく

「ブンちゃんならほつといて平気ぜよ！やぎゅじゃあるまいし…のう？」繋いだ手に目をやり、面白そうに細める仁王君。

「ちよつ…どつという意味ですか、それ！」恥ずかしくて手を離そうとするが、仁王君の手がそれを許してくれない。

「ピヨ？意味も何もそのまんまじゃが。」

ガラン、ガラン。

「……。よし。」二礼二拍手一拝をそつなくこなし、仁王君の方を向くと、彼は見たことないくらい真剣な顔で祈っていた。

「……プリツ。」視線に気づいた仁王君が片目だけ開ける。

振り返ると初詣の人の長い列が出来ていて、この中をまた戻るかと思うと、軽く目眩がした。

「やぎゅこつちじゃ！」そんな自分を知ってか知らずか、仁王君がちよいちよいと手をこまねく。

「はあ、人が多いなあ。華澄大丈夫？」あまり大きくはない神社なのに、人がたくさんいるせいで、出口が遠く感じる。心配そうに華澄の顔を覗き込む幸村。

「…んー…ちよつと疲れたかも。」苦笑いの華澄。

「じゃあ、少し休憩して行こう。」優しく笑う幸村。

境内の裏。先ほどまで人混みにいたことが嘘の様な静寂。なんとなく気まずくて仁王君と話せずにいた。

「あー…。」そこに幸村君の溜め息混じりの声が響く。

「なんじゃ、幸村か。他人の顔見て溜め息とは感心せんのか。」咎める様に言う仁王君。

「溜め息も出るよ…。君達までいたとは、全く揃いも揃って暇人だね。弦一郎の言った通り正月も部活入れれば良かったかな？」嘆いたように、嫌味言う幸村君。

「こつちだってお前さんがいるとは思わなかったんじゃ。つか、少しくらい羽伸ばしたってバチは当たらん。」いつも幸村君の小言は笑って受け流すはずの仁王君が珍しく突っかかっていく。

「におく…。」流石に止めに入ろうとして、

「くちゅッ。」という音で険悪な雰囲気もどこかに飛んでいってしまった。

『？？』仁王君と顔を見合わせる。

「あ、その…ごめん…なさい。」

幸村君の後ろから小柄な少女が顔を出した。

「華澄が謝ることないよ。寒いから…もう帰る？風邪でも引いたら大変だしね。」猫なで声の幸村。

「女性がいたとは気づかず、変な雰囲気のところを見せてしまいましたね。驚かれましたよう。…申し遅れましたが、私は立海大付属中の柳生比呂志と申します。」ペコリと丁寧にお辞儀をする。

「…仁王様よ。」まだふてくされている仁王君。

「ああ…おふたりが…。」華澄と呼ばれた少女が呟いてゆっくりと自分と仁王君を見てくる。

「なんじゃ？」「ぶつきらばうに華澄さんに問いかける仁王君。

「い、いえ！」「それだけ言つと頬を赤らめ、幸村の影に隠れてしまった華澄さん。

チクツと胸が痛んだ。

アア キットコレハ…

「失礼！」それだけ言つのがやっとでそのまま走り出す。

いろんな感情がぐちゃぐちゃになって頭が混乱しているのに、何故

か憤りの様なものだけはつきり感じる。…誰に対して？自分？それとも…？

「…はあー…解らない。」肺が空っぽになるくらい息を吐き、座り込む。

「何やっとなんじゃ、このボケ。」かがんで目線を合わせてくる仁王君。

「につ…！！？」言葉にならない。

「急いで追ってきたんぜよ。ヤキモチ妬きのお姫様がいるからのう。

「にやにやと楽しそうに上目遣いをする仁王君。」

「お姫様？仁王君ってやつぱり本命がいたんですね。」噂に付いた尾びれ・背びれだと信じていなかったが、本当らしい。

仁王君が丁寧に女子を振るのは有名な話。しかも決まってその理由は『部活に集中したいから』らしい。最近になってそれは建前で本命がいるからなんじゃないかと女子達に騒がれていたのだ。

「まだわからんか。ニブイのう。まっそこもいいんじゃないが。」真顔になり、少し躊躇した後、髪に触れてくる仁王君。

触れられているところが、熱くて、くすぐったくて、…嬉しくて…ポーンと仁王君を見つめていると、

「なんつう顔しとるんじゃない。そんな隙見せると…食べちゃうぜよ…？」と甘く仁王君が囁く。世界に自分と仁王君しか居ないようなそんな感覚に頭が痺れる。

もつと知りたい、仁王君のこと。

「に、仁王君であんまり自分のこと話しませんよね。」そこが魅力でもあるのだけど…やっぱり気になる。

「そうかのう？」あっけらかんと答える仁王君。

「無理に話さなくて平気ですが…でも知りたいんです。」

「…やぎゅ？」

「ただ…ちゃんと向き合い。」

「……まったくやぎゆは頑固ぜよ！……何から話そうかのう……ん……父親は、ギャンブル好きのろくでもない奴でのう。わしがガキの頃はしょっちゅう借金取りに追われてたんじゃ……。」

「……お母さんは？」

「知らん。物心ついた時にはもういなかったのう。」他人事のように口元に笑みさえ浮かべて言う仁王君。

「無理しないで下さい。」自分でも驚いた。自分で知りたいと言っただけなのに。

「何がじゃ？」仁王君のが目を丸くする。

「悲しい時は悲しい顔してください。」

「いや、悲しいとか以前に、母親の記憶はまるっきりないからのう。」

「仁王君の言葉が虚空に漂う。」

「いいえ、悲しいはずです。仁王君は感情を隠して自分自身その事に気づいてない時があります。」

「……。」仁王君が目で続きを促す。

「いつも一番近くで見ているから、解るんです。ペテン師なんて呼ばれているけど……、」そこまで言って急に胸がいつぱいで言葉が出なくなる。

「けど……それは他人とあまり関わらないようにする為の自己防衛手段じゃないのかと。」仁王君の方を向いているはずなのに、涙で滲み、声も震えそうになるのを抑えるのが精一杯だった。

く勘違いと期待く

「最悪。」携帯を放り投げ、ベットに顔を埋める岳人。

自分にも、ブン太にも苛立って仕方ない。

「バカは自分だったの。」わざとはつきり言い、自嘲の笑みを浮かべる。

別に何も望んでいない。お互い高め合える良きライバルとして近くにいられば、それで…それだけで…。

「やっぱ、謝るだけ謝っておこう！なんかスッキリしないし！」ガバツと起き上がり時計を見ると、午後5時過ぎだった。家を飛び出る。

「…こ、…ここか。」住所は知っていたが、来るのは初めてだった。怖じ気づき、インターホンを押そうとする手が震える。

その時。

「じゃ 柚萌と輝耶をよろしく！」ブン太の家から1人の女性が出てきた。

「姉ちゃん、毎回言われなくてもわかるって。」面倒くさそうなブン太の声。

「あら？あなた…。」ブン太姉が岳人に気づく。

「あ、…すみません。ブン太君に用があつて来た向日ですけど…。」改めて見るブン太姉は、ブン太にそっくりなかわいい女性で、ドギマギする。

「へえ〜美人さんねえ。ブン太ったら部活一筋かと思ったらやるこつとやってんじゃない！」感心した様に眺めてくる姉。

「…。」勘違いを訂正したいが、恥ずかしくて言葉が出ない。

「柚子姉、そいつ男だけど。」ブン太が飄々と言って退ける。

「えー！？ごめんなさい。だってあんまりにも…ねえ？」はにかん

で、はぐらかす柚子。

「『ねえ？』じゃねーよ！義兄にいさんとデートだろ！早く行けっ
ーの！」ブン太が柚子急かす。

「やっだ！時間！じゃ、バイト代弾むから！」バタバタと走って
い
く柚子。

しばらく柚子の背中をふたりで見送った後。

「なんかバタバタしててごめん。それでがつくん、用って？」照れ
くさそうに笑うブン太。

「あ…用ってほどでもないんだけど…。」言葉に詰まってしまふ。
「ふーん。とにかくさ、家入ろうぜい！」ブン太が玄関を開ける。

「ぶんちゃん！あそぼー！」

「ぶんたー、おなかへった！」女の子と男の子の姉弟きょうだいが走ってきた。
「誰？」

『だあれ？』と岳人と子供たちがブン太に聞いたのは、ほぼ同時だ
った。

「こいつらは、俺の姪の柚萌と甥の輝耶。そんで、こっちは俺の友
達のがつくん。」ブン太が丁寧ていねいに俺と姪たちに説明する。

「がつくん、おんなのこ？」輝耶が首を傾げ、

「きつとおひめさまだよ！かわいいもん！」と柚萌が目をキラキラ
させる。

「…っ。」「子供たちの期待？の眼差しに肯定も否定も出来なかつ
た。

「ぶっ…はは！」ブン太だけが、堪えきれず吹き出して笑っていた。

く勘違いと期待く（後書き）

柚萌ちゃんと輝耶くんは 5歳と4歳くらいかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569q/>

ヒツジとオオカミ

2011年5月1日00時10分発行